

『八田の蛇池』

昔、八田の村は、今よりもずっと奥へ入った山の中にあつたそうです。八田川の川上に、小さな池があります。昔、大蛇が、その池に住んでいたの、村人たちは、時々、池の側で雨乞い（あまごい）をしました。



それで、この池を「雨乞い沢」と呼んでいました。

昔、長く日照りが続いたことがありました。村人たちは、飯川村の光善寺を訪ね、法印さまに「雨乞い沢へ行って、お祈りをして下さい。」と頼みました。法印さまは、「信州の戸隠（とがくし）神社の雨乞いの水をいただいでくれば、さっそくお祈りしましょう。」と教えてくれました。

そこで、村人たちは、代表を選んで、信州へ送りました。代表の者たちは、雨乞いの水をいただきました。「帰り道だけは、決して休むな。」と注意されたので、夜通し歩きました。それは、休んだところに雨が降って、それでおしまいになるとも言われたからでした。

さて、村へいよいよ雨乞いの水が届くと、村人たちは、総出でわらの大蛇をこしらえ、それをかづいて、雨乞い沢へやってきました。池の前に、高いやぐらを組み、その上に太鼓をのせて叩きました。また、やぐらのそばに祭壇をつくり、お神酒や雨乞いの水を供えました。そして、法印さまが、読経を始めました。こんな風にして、雨乞いの式が行われたのです。

雨乞いは、七日間続けられました。その間、法印さまは、ご飯も水ものどへ通しませんでした。村人たちも、法印さまの後ろで、お祈りを続けました。太鼓の音も、休むことなく打ち続けました。すると、七日目の満願（まんがん）の日には、とうとう、雨が降ってきました。この雨で、村の田畑が生きかえり、村人たちは、安堵（あんど）の胸をなでおろしました。

今でも、この池に石を投げると、大雨になると言われています。また、その時、打ち続けた太鼓は、八田町に「雨乞い太鼓」「龍神太鼓」として伝えられ、太鼓打ちは、ますます盛んになっています。

（八田町 伝承）